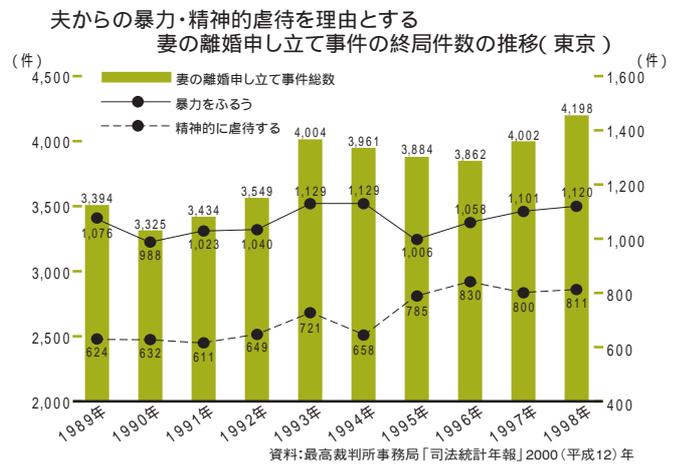


続けられる。「自分は夫だ」ということで夫であることに伴う特権を行使しようとする。この例のように、生活を夫に依存していれば、「誰のおかげで食べていられるんだ」というセリフは、十分な脅迫となる。まるで、首根っこを押えられているように。夫は妻を支配し続けるが、妻には一応生活を保障する。自由と生活保障のいずれをとるかという選択を妻は迫られる。

なぜ暴力を振るわれるのか

結婚している女性のドメスティック・バイオレンス体験の一つを書いたが、ドメスティック・バイオレンスは結婚生活だけにあるわけではない。親密な関係にある男女の間で、男性から女性に向けられる暴力が、女性運動の中で、ドメスティック・バイオレンスと名付けられた。ところで、結婚している場合は、そうでない場合以上の困難がある。結婚が法律婚である場合はなおさらだ。それは、関係を切断するには、離婚という法的手続きをとらざるをえないからであり、暴力を振るう夫は、離婚に簡単には応じてはくれないからだ。

残念ながら、人類の歴史は男性の女性



に対する支配の歴史でもある。未だ、私たちは男女が平等な社会を体験したことがない。少しずつ、不平等から平等へと向かつてはいるが、「道は遙か」というのが、現状だ。今、私たちがドメスティック・バイオレンスという概念で理解している暴力は、この男性の女性に対する支配の歴史の産物である。

男女の間の生物学的な差が、社会的な位置・力の差にすり替えられて、男性が女性の優位に立つのが、この社会の基本的構造になっている。世の中の大事な仕事と考えられているのは、大体男性たちが独占している。国の政治から、町内会まで長は男性であり、小学校から大学まで、校長は圧倒的に男性である。経営者も大多数は男性である。

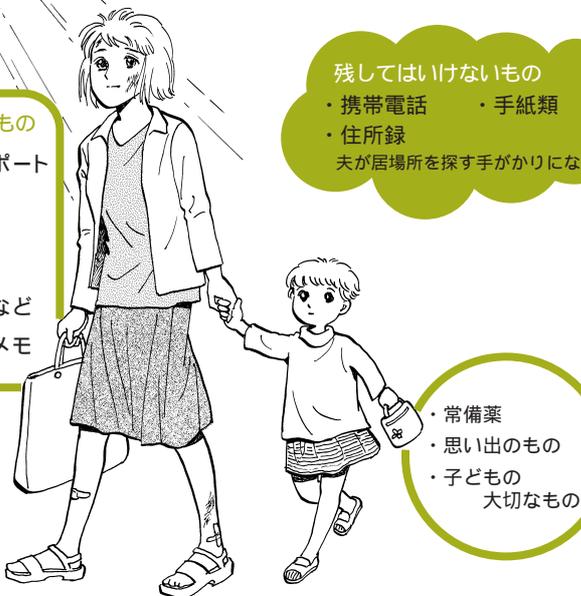
「女性初の」という新聞記事はあっても、

「男性初の」はめったにない。男性優位社会は、男性たちに自分たちは偉いと錯覚させるだけでなく、女性もそう思いこむ結果を生んでいる。男性の言うことを受け入れ従う心証を女性が持たされている。組織・家庭も含めての長の多くが男性であることから、男性の言動は、信頼するに足る責任あるものであるかのようになり、見られる。男性というだけで価値がある社会では、女性の価値も、結びついていて男性が誰かによって決められがちである。女性が職業を持っていないときなどは、特にそうである。ある有名ドメスティックの顧客名簿には、本来の顧客である女性の名前や職業と共に、夫のそれを記入する欄がある。結婚により誰に所属しているかは、時として女性にとっても自慢したい事柄である。

このような男女の社会的地位の差がもたらす男の方が偉いという漠たる信念は、経済力の差に直結している。結婚すれば男性に扶養されることを前提にした女性の低賃金は、男女共同参画社会のかけ声の中でも、あまり是正の対象としては取りあげられない。

男女の力関係の差は、単なる差ではない。この違いを維持しようとする力学が働く。優位に立っている男性は優位性を維持しようとする。人の優位に立つことは、気持ちがいいものだからだ。この優位性はどのようにして維持できるのか。相手に対する支配を続ける

ことである。そのためにもっとも有効な方法が、むき出しの力・暴力の行使である。これは、誰もが知っていることだ。言うことを聞かない相手を従わせるには、議論するということもある。しかし、議論で勝つことに自信がないときは、自分が既に優位に立っているものを使う方が手取り早い。体力であり、経済力であり、社会的地位であり、優位性の凝縮した男であることそのものである。これによって、相手を黙らせ、自分の思うように事を進めていく。ここで行われていることは、人に対する支配である。人に対する支配は、人を自分の所有物のように扱うことでもある。



家から持ち出すもの

- ・免許証やパスポート
- ・保険証コピー
- ・現金
- ・自分の印鑑
通帳など
- ・緊急連絡先のメモ

残してはいけないもの

- ・携帯電話
- ・手紙類
- ・住所録

夫が居場所を探す手がかりになる

- ・常備薬
- ・思い出のもの
- ・子どもの大切なもの

キリトリ